

(セッション1)

まず、ヨハネの福音書4章を見ていきましょう。サマリヤの女についてです。1節から4節です。

- 4:1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを受けていることがパリサイ人の耳にはいった。それを主が知られたとき、  
4:2 ——イエスご自身はバプテスマを受けておられたのではなく、弟子たちであったが、——  
4:3 主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。  
4:4 しかし、サマリヤを通過して行かなければならなかった。

ヨハネの4章を見る時、4節が大切です。

「イエスはサマリヤを通過して行かなければならなかった」とありますが、なぜ、そこを通らなければいけなかったのでしょうか？

その必要性がわかれば、その意味がわかります。

ここに小さな地図があります。(地図を示しながら)…ここにエルサレムがあつて、イエスはエルサレムからガリラヤに行こうとしていました。しかし普通、ユダヤ人はこのように、まっすぐエルサレムに向かうことはしません。

あえて東側のヨルダン川を越えてペレヤに行きます。そして北上して再度、ヨルダン川を渡ってガリラヤに行きます。なぜなら、その途中にサマリヤがあるからです。サマリヤを迂回するためです。

ユダヤ人の特にラビなどは、そこを迂回するのが普通でした。しかしラビであるイエスは、それでもサマリヤを通過して行かなければいけませんでした。

ヨハネの福音書4章5節、

4:5 それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。

「スカル」には「酔っ払っている、または「嘘をついている、という意味があります。

これはユダヤ人がサマリヤを嫌っていたので、そのような名前をつけたと言われています。なぜ、彼らはサマリヤ人を嫌っていたのでしょうか。

サマリヤはユダとガリラヤの間にあります。

サマリヤは北王国に属していました。そしてユダは南王国でした。

BC722年に、北王国はアッシリアに侵略されました。そのとき北王国の人々が、アッシリアに連れて行かれました。当時は、サルゴン2世がアッシリアの王でした。

サマリヤの人が連れて行かれ、他の地域にいた人々(異邦人)が、サマリヤに連れて来られました。

サマリヤの地には、ほんの少しのユダヤ人のみが残されました。

そしてユダヤ人と連れてこられた外国人とが、互いに混じり合いましたが、混血の彼らはユダヤ人から見れば雑種のような扱いを受け、純潔でないで見下されていました。

彼らもモーセ五書を信じていましたが、彼らの概念は歪んでいってしまいました。

たとえば、「エデンの園がサマリヤにあった、とか、「ノアの箱舟はサマリヤに到着した、また「イサクもサマリヤで捧げられた、…、などと信じていました。

彼らはサマリヤのゲリジム山で、それらすべてのことが起こったという教理を作ってしまったので、サマリヤ人にとっては、ゲリジム山がエルサレムのような神聖な場所となりました。

ユダヤ人にはエルサレムが神聖な場所であり、サマリヤ人にとってはゲリジム山が神聖な場所でした。

彼らはモーセ五書を守って信じてはいましたが、それが歪曲されたため、ユダヤ人にとってサマリヤは汚れたもののように見えたし、迂回して絶対にサマリヤに入らないようにしました。しかし、イエス・キリストはそのサマリヤを通過しようとしていました。

そして、「うそつき」とか「酔っ払い」という意味のスカルという町に入りました。今日、そのスカルがどこにあったのか特定されてはいませんが、考古学の発掘調査により、ほぼここであろうと推定された場所があります。ヤコブの井戸から1.5km離れた場所です。

ヨハネの福音書4章6節、

4:6 そこにはヤコブの泉があった。さて、イエスは旅に疲れて無造作に泉のほとりにすわられた。時は正午ごろであった。

ヤコブの井戸というのは旧約聖書に書かれていませんが、創世記33章にはヤコブがその土地を買って住んだと書かれています。その章にはヤコブの井戸は出てきませんが、そこに住みついたということから井戸があったと推察できます。

4章6節で、イエス・キリストは、疲れて非常に喉が渇いていました。

ヨハネの福音書は、イエスが神の子であるということを示しています。

彼は墮落した人間にいのちを与えるためにくだってこられたとヨハネは主張しています。イエスがくだって来て、私たちに神聖ないのちを与えると述べています。

しかし同時に、キリストはこの地上で「人間として、生活してもいました。

ここで問題なのは、二千年前の人々が、イエスを「人間」として受け入れてはいたが、「神」として受け入れることができなかったということです。

二千年前、イエスが神であると認めることは、異端のようにも見えました。

今日はその逆となっています。

イエスを神の子とは信じていますが、神であると同時に私たちと同じように人間としての姿をとっていたことが、中々信じられないのです。イエスが人間としての弱さをもって生まれたということ信じないことが、今日は異端になります。

ヨハネは、イエスもお腹が減ったし、のども渇いたということを示しています。

イエスは井戸のそばに座っていて、時刻は6時頃でした。この6時頃とはユダヤ人にとっての6時で、だいたい正午頃といわれています。ローマの時間では、朝か夜の6時頃となってしまいます。これは重要なことなのですが、…7から8節を読みます。

4:7 ひとりのサマリヤの女が水を汲みに来る。イエスは彼女に、「水をのませてください」といわれる。

4:8 弟子たちは町へ食料を買いに出かけていた。

サマリヤの女は6時（正午）頃、水を汲みに来ました。

通常水汲みは朝行うものだったので、これは彼女が人に会わないように、あえて昼の時間に来るという「訳あり」の女性だったことを現しています。

人に後ろゆび指されるような生活、たとえば、売春していたかもしれないと推察もできますが、4章には、はっきりとは書かれていません。

ローマ時間で考えると朝であろうと夕方であろうと、6時に水を汲みにくるのは、不思議なことではありません。

ユダヤ人の時間で考えるならば、昼に水を汲みにくることは、通常ないことでした。もしかしたら、水が足らなくなって来たのかもしれませんが、町から井戸までは1.5キロなので結構な距離です。そんなに遠くないところにも井戸はあったはずですが、でもこの女性は、遠いこの井戸に来ました。

なぜ、この女性はこの井戸に来て、イエスもそこに行かなければいけなかったのでしょうか？

そして、4章9節です。

4:9 サマリヤ人の女はいう、「ユダヤ人なのに、どうしてサマリヤ女のわたしから飲み物をお求めですか」と。ユダヤ人は、サマリヤ人と付きあわなかったからである。

サマリヤの女の言うとおりに、それは驚くべきことでした。当時、男性はそう簡単に女性に声をかけませんでした。しかも、それはユダヤ人の男性です。男であり、ユダヤ人でもありました。

ですから、自分がサマリヤ人女性であるのに、なぜ水を求めるのかと聞きました。

当時ユダヤ人はサマリヤ人とつきあわなかったし、たとえば同じコップから飲むこともありませんでした。ユダヤ人は汚れた食器から食べたり飲んだりしなかったからです。

しかし、イエスさまは、不可触民（ふかしよくみん）とされていたサマリヤ人から、水を求めなければならなかったのです。コップを持っていなかったのも、彼女の器から飲むことになります。

この状況は文化的に非常に問題で、タブー視されるものでした。

今回は見ませんが、イエスのところに来たニコデモのような人もいます。

ニコデモはイエスのところに夜中にひっそり来ましたが、サマリヤの女の場合は、イエスの方から日中に会いに行きました。

4章10節、

4:10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

“神の賜物、と書かれています。

この賜物についてですが、使徒行伝2章38節に、

「そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

と書かれています。

「賜物として聖霊を受けるでしょう」…、イエスは“賜物、と“生ける水、と言いました。

“生ける水、とは“聖霊、を意味しています。キリストは、あなたが求めるなら聖霊が与えられると言われました。

4章11節、

4:11 彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。」

彼女の態度が敬う態度に変わって、イエスを「先生、と仰いました。

9節ではイエスを「ユダヤ人、と呼んでいたのに、11節では「先生、と呼んでいます。

そして彼女は、「先生…この井戸は深いのです。あなたはバケツもなければコップもない。どうして生ける水を手に入れるのですか?」と、聞いています。

このとき彼女は「生ける水、を理解していませんでした。ユダヤ人にとっては「生ける水、とは、流れている川をイメージします。流れている水は新鮮な水だからです。

4章12節、

4:12 あなたは、私たちの先祖ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。

彼女は疑問に思って、こう聞きました。

ヤコブは確かに肉体的な必要を満たすために井戸を造りました。

しかし、イエスはサマリヤの女の霊的渇きを癒すために、ここへ来ました。

4章13～14節、

4:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

私たちの身体は、定期的に水を飲む必要があります。

同じようにイエスのもとに来た人は、定期的にこの水を取り入れる必要があると思います。

その人がイエスのもとから離れていくのならば、水から出た魚のように渇き、弱って行ってしまいます。

これは「主によりたのむ、ということを示しています。

エペソ 5章18節には、

5:18 また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

とありますが、聖霊に満たされ続ける必要があります。

イエス・キリストは、肉体的なものと同霊的なものを対比させて用いています。

私たち信じる者も、神から離れていくなれば徐々に渇いていくと思います。

しかし、キリストはサマリヤの女に「あなたの霊的渇きはうるおされる」と仰いました。

ヨハネの福音書には「水、ということばが、くりかえし出てきます。

「水、と「光、が、よく出てきますが、今回は「水、です。

それは、バプテスマのヨハネから始まりました。洗礼者ヨハネは「水、のバプテスマを授けていました。

ヨハネ2章1～11節を見ますが、ここに「初めのしるし、があります。まず1～4節です。

2:1 それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。

2:2 イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。

2:3 ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません。」と言った。

2:4 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」

脇道にそれますが、イエス・キリストは母親に向かって、なぜ「女の方」と言われているのでしょうか。少し異様に聞こえるかもしれません。

イエスはマリヤに一度も「母」とは言わなかったのです。イエス・キリストは十字架の上でもマリヤに向かって「女の方」と言われました。

イエス・キリストの神聖な出生を強調するために、そのことばが使われている可能性もありますが、イエス・キリストがマリヤを「母」と言わなかったのは、イエスが「神の子」だったからです。

(人を介さず) 聖霊によってマリヤがみごもったので、遺伝子的にも神の子です。ローマ・カトリックでは「聖母マリヤ」と言いますが、聖書では言いません。

4 節に「女の方。私の時はまだ来ていません」と書かれていますが、この「私の時」については、あとから説明します。

2章5～6節、

2:5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」

2:6 さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。

水がめの説明に入る前に、まず、1 節に書かれた「3 日目」を見てみましょう。

1 章29節を見ると、そこには「翌日」と書かれています。

続いて35節に「その翌日」43節にも「その翌日」、2 章1 節には「それから3 日目」とあり、足していくと6 日になります。

アダムとイブは6 日目に造られました。(ここに婚姻に関する暗示があります)

ヨハネの福音書では、ここで一つの婚礼があったと書かれています。これをヨハネは「初めのしるし」と言いました。

2 章6 節を見ると、80リットルから120リットル入の水がめが、6つ置いてあったと書かれています。当時のユダヤ人の家には石の水がめがあり、きよめのために使われました。

イエス・キリストは、空の6つの水がめに「水を満たしなさい」と言われました。水が聖霊を意味しているということは、先ほど学びました。

この「水で満たす」ということは、「生ける水で満たす」ということを示しています。そしてその水が、ぶどう酒に変わりました。

イエスは、このユダヤ人のきよめの儀式だったものを、水を満たしてぶどう酒に変え、「新しいいのちを現す、儀式に変えました。

「ぶどう酒」は、ユダヤ人の生活の中では、喜びが満ちあふれていることを示し、「6つの水がめ」は人間を象徴します。イエスが「水がめ(人)」に「生ける水(聖霊)」を注ぎ、「新しいいのちに喜びが満ち溢れている(ぶどう酒)」…ということを示しています。これは大事なことです。

「水がぶどう酒に変わる」という意味を理解できたでしょうか。

ヨハネは、水がぶどう酒に変えられたことを「第一の奇跡、でなく「第一のしるし」と呼びました。

“最初のしるし、と書かれているのは、これがイエス・キリストの役割（使命）だったからです。そのため、サマリヤの女に向かって「あなたがそれを知っていたなら、あなたのほうからそれを求めたでしょう」と言われました。（ヨハネ4章10節）

これは“その賜物（聖霊）によって人生が変えられ、新しい人生が満たされていく、ということの意味していました。

彼女の人生に喜びがわきあがってきたと思います。

賜物である聖霊には、2つの働きがあります。

まず最初に、私たちの考えを変えていきます。

ローマ12章1～2節には、こうあります。

12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

12:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

私たちの思い・考え方が、聖霊によってキリストの考え方のように変わっていきます。

性質を変えたいと思って努力しても、考え方が変わっていきません。

イスラム社会を考えてみましょう。

サウジアラビアなどでは、女性はブルカをかぶるように強要されます。目だけが出ている服で、それで買い物などにも行きます。

女性は、ブルカをかぶる前に、なにをどのように考えているのでしょうか。

たとえば、教会にミニスカートををはいてきた若い女性がいたなら、もっとTPO（時と場合）を考えた慎ましい服装にしないと注意されると思います。

本心では反抗しながらも、しぶしぶ服装を変えるかもしれません。しかし本当に問題なのは、その服装ではなく、その考え方なのです。（服を地味に変えても、反抗的な考えは変わっていない）

みことばを通して聖霊が働きますが、聖霊によって、はじめて“考え方、が変えられていきます。その次に聖霊によって、その人の“性質、が変わっていきます。

世の中にあるほとんどの宗教は、内側を変えようとするのではなく、外側を変えていこうとします。

それはちょうど、身体に湿疹ができるようなもので、湿疹薬の軟膏を塗れば一時的には良くなりますが、又ぶりがえします。湿疹ができる原因は内側にあるので、湿疹薬でなく抗生物質が処方されると内側の問題が解決されて、はじめて湿疹は治ります。

そのため初代教会では、信条とか教理とかを問題視しました。「聖書は、神のことばである」という教理が大切でした。その教理によって異端を排除していました。

聖霊によって、はじめに考え方が変わって、次にその人の性質が変わっていきます。私たちの性質や生き方が変わっていきます。これが、賜物である聖霊の次の働きです。

ヨハネの福音書14章には「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行く」という箇所があります。しかし、同時に場所だけでなく、私たち自身もその場所に合うように変えられていきます（イエスは同時にあなたがたも整えるという意味）。

それなので、ヨハネは“水、ということばを至るところで使っています。

また、マタイ11章11節には、同じようなことが書かれています。

11:11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。

ルカ7章28節にも……

7:28 あなたがたに言いますが、女から生まれた者の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。しかし、神の国で一番小さい者でも、彼よりすぐれています。

これは、どういう意味でしょうか。

“生ける水、”というのは、イエスが十字架にかかった後、与えられたものです。

バプテスマのヨハネは、“生ける水、”を持っていませんでした。

しかし、彼は旧約時代では、一番偉大な人でした。

“生ける水、”が、私たちの内側にあるので、神の御国では“いちばん小さい者、”でも、洗礼者ヨハネより大きい偉大な者となります。

では、“水、”について、今度は、ヨハネ3章を見てみましょう。

イエス・キリストはニコデモに話しています。

ヨハネ3章5節、

3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。

ヨハネの福音書では、水は神の霊をあらわしています。

「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません」と、ニコデモに言われました。

これを理解するには創世記に戻らなければなりません——“水、”と“御霊（みたま）”、についてです。

創世記1章1～2節

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は形がなく、何もなかった。やみが深い水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。

ルシファーが墮落したことが前提にあって、地は茫漠とした状態でした。1節と2節の間には、この天変地異によって地が荒廃したことが書かれており、神は“創造、”でなく“再創造、”を始められました。地球や星の再創造のようなことです。

どのように再創造するかというと、同じように“霊、”と“みことば、”によってまた造るということです。

“神の霊が水の上を動いていた、”——この“水、”が、ここでは“神のことば、”を象徴しています。

たとえば、ヨハネの福音書15章3節を見てみましょう。

15:3 わたしの話したことばによって、あなたがたは既に清くなっている。

“ことばによって、”とあります。

また、エペソ5章26節では、

5:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、

“みことばのきよめ、”についてが、書かれています。

“水の洗いきよめ、”—— “水、”は、“ことば、”を象徴しています。

“ことば、”と “霊、”が、ともに働らいて世界を再創造しました。

このように神のことばと霊が、私たちを再創造します。なぜなら、私たちは暗闇にいるからです。イエスは光です。

イエスは私たちのところに来ました。彼の光の中に入ることによって、私たちも彼の光を受けることができます。神は光であり、その光に照らされて、私たちも光を放つことができます。

創世記1章1節のように、私たちも茫漠で何もなく空っぽです。

これが、サマリヤの女の状態です。そこに神が働きました。

ヨハネ3章では、イエスの言ったことが、ニコデモには理解できませんでした。

イエスは、ニコデモに対し「あなたはイスラエルの指導者なのに理解できないのか」と言われました。ニコデモはラビの中のラビでした。

なぜイエスは、ニコデモを叱ったのでしょうか。

これが、イスラエルが待ち望んでいた “そのもの、” だったからです。

エゼキエル37章2～9節には、干からびた骨が生き返る話があります。

エゼキエルは、神によってこのように預言しました。

エゼキエルは旧約時代の預言者ですが、救い主の象徴です。

なぜなら、エゼキエルも “人の子 (Son of Man) ” と呼ばれていました。イエスも “人の子、” と呼ばれていました。

エゼキエル37章で、干からびた骨の話をしたのち、神は「いかにしてこの干からびた骨が生き返ることができるか？」と問い、エゼキエルは「わからない」と答えました。

このとき神は、「骨に向かって預言せよ」と言われました。

エゼキエルが預言すると、骨が集まってきましたが、そこにはいのちはありませんでした。

次に神は「息に預言せよ」と言われました。

息はヘブル語で「ルア (נשמה)」です。息は霊と訳されることもあります。

エゼキエルが預言すると神の息が来て、干からびた骨が生き返りました。

エゼキエル18章31節を見てみましょう。

18:31 あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。

新しい心というのは、新しい考え方です。

“新しい考え方をして、新しい思いをもって、” ということです。



“…そして新しい霊を得よ、  
これが、新しい心と新しい霊という意味で、“新しい契約、として知られています。

イエスは教師であるニコデモに向かって「なぜ、あなたはこれがわからないのか？」と言われました。二人はユダヤ人同士、またラビ同士であったので、ことばを交わすより聖句の引用で話しました。

その聖句がどこにあり、どういう意味であるかもわかります。ユダヤ人はそのため、聖書を暗唱しています。今日では、私たちは何章何節で言いますが、当時はそういうものはなく、章の区切りさえありませんでした。

イエスはニコデモに「あなたがたは、水と霊とにあつて新しく変わらなければ、天の御国には入れません」と言われました。

## (セッション2)

最初に水がぶどう酒に変わった箇所です。

聖書の人物で、水を別のものに変える人がいましたが、誰だか覚えているでしょうか？

…モーセです。モーセは水を血に変えました。しかし、それは裁きの奇跡でした。裁きであり、死をもたらしました。いのちではありません。

イエスは逆に水を新しいぶどう酒に変えられました。ぶどう酒は同時に血もあらわしていますが、旧約の律法は死をもたらしました。

律法は“殺す、ものですが、イエス・キリストのものは“いのちを与える、ものです。

ヨハネの福音書には、色々な水の話があります。

後半は、ヨハネ19章34節です。

19:34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。

“血と水がわき出た、とは、どういう意味でしょうか。血は贖(あがな)い——“罪の贖い、を象徴し、水は“注がれたいのち、を示しています。血が罪を贖い、水がいのちを与えます。

神からいのちを受けるために救われました。救われて放置されず、いのちが与えられます。

福音には2つの部分がありますが、その片方がいつも忘れられています。

イエス・キリストが「誰でも疲れたら私のもとへ来なさい、休ませてあげよう」と言っている“神の安息、の話は昨年しました。

キリストは、疲れた者に「安息を与えよう」と言われました。

今日、著名なキリスト教書である『パーパス・ドリブン(人生を導く5つの目的)』の中にも、イエス様が「誰でも疲れている者は私のもとへ来なさい、休ませてあげよう」と語ったことについて書かれています。その意味の解釈はとても軽く無責任で、付け足し程度にイエス様がいれば良い——ぐらいのものです。

しかし、イエス様がニコデモに言った意味は、とても重いものでした。

「イエス様のもとに、ありのまま来なさい」と言う人もいます。それは一部真理ではありますが、イエス様のもとに来て“新生、されたなら、そのままいいわけではなく、変わっていかなければなりません。

(ニコデモには、新しく生まれ変わらなければ天の御国には入れないと言われました。そのままでいい——安息をあげるよ…ではないのです)

そこで、神は何かを期待されて、その人が来て変わっていけるように助け手を与えています。それが「恵み」です。

恵みには2つの種類があります。ここで恵みの例を挙げます。

例えばプールで泳いでいて、誰かが溺れたとします。

まず、その人を引き上げたとします。その後も溺れているのでしょうか。

引き上げてしまえば溺れていないし、もう安全だと思います。

しかし、彼は生きていますでしょうか。息をしていないかもしれません。なので、引き上げて水を吐き出させて、人工呼吸をしたいと思います。

水から引き上げるだけでなく、その後、治療が必要なのです。

水を吐かせて、息ができるようにします。酸素を与えます。

イエスが来て罪を贖ったというのは、福音の半分です。あと半分は「新しく生きる、ということ」です。「新しい清い生き方をする、——ということ」です。

旧約聖書では律法が与えられて、生け贄（いけにえ）のシステムがありました。生け贄のシステムは、罪の贖いのためにありました。

詩篇103篇3節には、

103:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、

と、書かれています。

旧約でも神はすべての罪を赦すことができました。

生贄のシステムが、そのためのものであり、同時にどのように生きるべきであるかという律法を定めて与えました。十戒のようなものです。

「新しい清い生き方、をするためです。

イスラエルはエジプトから出てきました。エジプトから救い出されたのですが、それは、サタンの象徴であるパロから救い出されたのです。しかし、そのまま約束の地に入れたわけではありません。

約束の地は備えられていましたが、入る前にその民を整える必要がありました。約束の地では、神の定めによって生きなければならなかったからです。そして、律法を守るということは、とても難しいことだとわかりました。

新約聖書ではイエスの血が私たちの罪を赦しました。

しかし、赦されただけでは半分で、もう半分は「新しくいのちを得て生きる、ということ」です。

罪が赦されたという、それだけで充分と思うなら、半分だけです。

聖霊についての誤解もあります。聖霊を受けることは異言を話すことだと曲解している人もいます。または奇跡や癒しだとも言いますが、聖書の中では、「聖霊は賜物、だと書かれています。人生の中で罪に打ち勝つための「賜物、だと言っています。

聖霊は私たちとともにいて、私たちに「それをするな」とか「それを見るな」「時間を無駄にするな」などと、教えてくれる場合もあります。そのときは、私たちはそれに従わなければなりません。

たとえば、見るべきでないと言われても、TVチャンネルを変えるのは聖霊の働きでなく、自分でやらなければなりません。自分で処理しなくてははいけません。

そのように“従う、ことは、愛から来ます。

申命記6章4節「聞け、イスラエル」とある箇所を見ていきましょう。

6:4 聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。

ヘブル語では「聞く」には「従う」の意味があります。「聞いて従え」の意味です。聞いて聞き流すのではなく…です。

たとえば、目覚まし時計が鳴っても、止めてまた寝てしまっただけではいけません。そこで起きなければいけません。ヘブルの「聞いて従いなさい」とは、そういう意味です。

ルカの福音書10章27節には、こうあります。

10:27 「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」

もし、聞いて従わないのであれば、神を愛していないのだと思います。主を愛していなければ、聖霊に対して聞き従うことはできないと思います。

主に聞き従わなければ勝利はないし、神よりもこの世の中を愛しているのかもしれない。それなので、罪が入ります。

私たちが、聞かず、従わず、愛さないがゆえに罪が入ってきます。

申命記は“2度目の律法、ともいわれ、モーセは繰り返し語っています。しかし、申命記の最後にモーセは「イスラエルの民は、神を愛さず聞き従わないだろう」と預言しています。

そして「心に割礼を受けなさい」と言っています。「心に割礼を受ける」というのは、新約の時代ではなく、そもそも旧約のモーセの時代から言われてきたことです。

今日の教会では、福音のはじめの半分しか話さないで、罪が入ってきてしまいます。

“リーダーや支配者になりたい、と、人は思うのですが、誰も“仕える者になりたい、とは思いません。

旧約では、生け贄のシステムによって方法が備えられており、そして律法が与えられましたが、守ることができませんでした。

エゼキエル36章25節には、

36:25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、

とありますが、“水を上から振りかける、とは、カソリックが行うようなものでしょうか。——違います。“水を上から振りかける、とは、人生のすべての領域（仕事・家庭・地域社会…）において、清めていくということです。

イスラム社会のようにブルカをかぶることではありません。外側のみ取り繕うものでなく、内側から変わることが必要です。

エゼキエル36章26、27節

36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

36:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。

旧約では律法を守ることができませんでしたが、新約では新しい霊が与えられたことで、守れるようになりました。

マタイ1章21節では、御使いが「その子はすべての罪を贖います」と言いました。罪とは、結果ではなく罪の性質を言っており、罪自身を取り除くことです。

先ほど話した、溺れていた人を水から引き上げただけで、その人が息をしていない状態（福音のはじめの半分）です。新しい息が引き込まれなければ、ならないわけです。

これは神には、はじめからわかっていたことで、モーセも律法は守れないことを預言していました。

ここでエデンの園に戻っていきます。

アダムとエバは、なぜ神のことばを守らなかったのでしょうか。

「聞け、イスラエル」でなく、「聞け、アダム、エバ」かもしれません。彼らは聞いていたかもしれませんが、従っていませんでした。彼らは神よりも自分たちのほうを愛してしまいました。

水といのちの話にもどりますが、イエスは死んで、それを解放しなければなりませんでした。

血が罪を赦し、贖われます。罪を赦すということですが、罪を赦されたからといって、その人は正しいのでしょうか。

聖書は「赦されただけでなく、清められなければならない」と言っています。たとえば盗みの罪から赦されても、盗む性質が変わっていなければ、盗みを繰り返してしまいます。

新約聖書のことばで「義と認められる」ということは、そのような「罪がなくなっている」ということを示しています。

神の義とは、キリストの死からきました。イエス・キリストが罪を背負われたからです。

これは重要なことで、罪から赦されただけでなく、私たちが義と認められなければなりません。

そのためには、私たちがイエス・キリストの性質を受け継いでいかなければなりません。

キリストの脇腹が突かれて血と水が出てきたときのように、私たちの罪が赦されることと義と認められることが必要です。

恵みというのは「罪の赦し」と「清い生き方をする」ということです。

このように2つの意味があります。

ここでサマリヤの女の話にもどっていきますが、ヨハネ4章14節を見てください。

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

生ける水について説明しました。

が、しかし15節、

4:15 女はイエスに言った。「先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

……彼女は、まだ理解していません。

4章16節、

4:16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」

この生ける水を与える前に、彼女が神の前に正しくなければいけません。それでイエスは、女に言いました。

4:17 女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。

4:18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」

イエスは彼女に向かって「罪人、とは言わず「夫が5人あった、と言っただけでした。

「5人の男がいた、のではなく「5人の夫がいた、つまり、5回結婚したということです。金目当てに体を売っていたわけではなかったということです。

2千年前の当時、平均寿命は短かったし、病気・戦争・飢饉もありました。

ルツ記では、ルツは夫を早くに亡くしましたし、また当時の女性は少しの理由でも離婚されることがありました。たとえば夕食を焦がしただけでも離婚されたりしました。

モーセは離婚状を書けば別れられると言ったかもしれませんが、神はもともと単に男と女をそんな風に造ったわけではないし（マタイ19章8節）、子供が生まれないからと離婚していいと言ったわけでもありません。

サマリヤの女は、理由はわかりませんが5回結婚し、5回離婚したようです。夫が別の女性に走ってしまったか、あるいは夫の暴力で離婚したのかもしれませんが。なぜなら、キリストは彼女に「もう罪を犯すな」と言ったわけではありませんでした。

そのとき女は、イエスに対し「あなたは預言者だ」と言いました（19節）が、はじめは「ユダヤ人、次に「先生、その次に「預言者、と言っただけです。

イエス・キリストのそばに立つと、少しずつそれが明らかになっていきました。

ヨハネの福音書4章18節にあるように、5回結婚したので、もう結婚しても意味がなかったからか、または「レビレート婚（夫が死んだ後、親族に引き取られて子を残す制度）、ということもありました——そのため今一緒にいる男性は夫ではないとも考えられ、いずれにせよ「結婚してない、という意味のようです。

4章20節、

4:20 私たちの先祖は、この山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」

ここで、「先祖は、この山で礼拝しました」という過去形になっているのは、なぜでしょう。

サマリヤ人は、ゲリジム山に礼拝場を作りました。その山で長年礼拝がなされていました。

サマリヤ人の神殿は、BC128年にヨハネ・ヒルカノスというユダヤ人の王によって破壊され、無くなりましたが、その場所で礼拝は続けられました。

話を戻しますが、——なぜイエス・キリストは、そこでその女性と会わなければいけなかったのでしょうか？

ひょっとしたら、彼女はそこで神様に向かって祈っていたかとも思われます。5人の夫とうまくいってなかったためかもしれません。

現代社会では、社会保障もあれば年金制度もありますが、当時は老後、育てた子供たちだけがたよりでした。その女性には神の助けが必要だったかもしれません。神殿に行って礼拝したかったかもしれませんが、神殿はなかったの、代わりにヤコブの井戸だったのかもしれませんが。

井戸は町から1.5キロ離れていました。その女性は、聖地巡礼のように毎日井戸まで歩いていたのかもしれませんが。

そして、サマリヤの女は今、キリストに「はっ、と気づかされて「生ける水が欲しい。どこで礼拝したらいいのか？」と質問しました。

ユダヤ人には神殿があるが、我々にはないし、どこで礼拝したらよいか——。サマリヤ人で異邦人なので、イスラエルにも行くことはできませんでした。

4章21節、

4:21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。」

21節では、どこで礼拝するのが問題でなく、「どのよう、に」誰、を礼拝するのが問題だと言われました。続けて4章22節、

4:22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。

イエスは、ユダヤ人は正しい教理をもっているが、あなたがたは正しくないと言っています。トーラーを知っていますが、曲解しているからです。

——救い主はユダヤ人から生まれます。

4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。

今はエルサレムで礼拝しているけれども、そうでないときが来ますと言っています。

エルサレムに行けないからといって、真の礼拝者ではないというわけではないのです。イエスは、この女に向かい「あなたも真の礼拝者になれる」と言っています。

神は霊です。霊である神を霊をもって礼拝します。

霊とまことをもって父を礼拝する人が、「真の礼拝者」です。

今日の人々は、礼拝するという概念が間違っています。礼拝（ワーシップ "Worship、"）というのは、賛美歌を歌うことではありません。

教会に行き決められた時間内、歌をうたう。その後メッセージが始まり、その合間に献金があり……、何を言いたいかという、それらのプログラムが終わったら、礼拝は終わりなのではないでしょうか？

教会に行って感謝して歌うだけでなく、キッチンや寝室でも礼拝するかもしれません。

礼拝とは、24時間365日のことだと思います。週1回の特別な場所だけのことではありません。イエス・キリストは、そのようにしていました。

旧約時代、人々はどのように礼拝していたのでしょうか。

ダビデは裸で踊っていました。この王が裸で踊ったように、体全体で表現するのも悪くはないのです。

しかし、真の礼拝者は霊によって礼拝します。神が霊であるから、まことをもって——私たちの知性でも思いでもある“霊”で礼拝します。

神は“真の礼拝者”を探しています。

たとえば、創世記22章5節です。

22:5 アブラハムは若者に言った。「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていてください。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」

アブラハムが神を礼拝（ワーシップ）するためにモリヤの地に歩いて行ったとき、そこに音楽はありませんでした。（本来、ワーシップ“Worship”は「礼拝」という意味で、「音楽で賛美する」という意味ではありません。）

礼拝（ワーシップ）＝音楽ということは、一旦忘れましょう。

またヨブ記1章20節では、

1:20 このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、

これはヨブが、家族・財産すべてを失ったときです。ヨブはひれ伏して礼拝しました。

「主の御名はほむべきかな」と、状況が悪くとも神を褒め称えました。

“霊とまことをもって”とは、聖霊が私たちの思いを支配している状況だと思います。

去年は、“体”と“心”と“霊”について話しました。

“外庭”と“聖所”、“至聖所”の話もしました。“外庭”は、我々の“肉”、神の霊は“至聖所”にあります。

——私たちの霊は、神の霊を拝します。

“まこと”とは、なんでしょう。現実的なものだと思います。

人は、職場・家庭で色々な顔をもっていると思うのですが、365日24時間、どんなときであっても“神の前”にあって、正しい者であること、だと思います。

“まこと”の反対は“偽り”、“取り繕う”、“間違い”、かもしれません。

新約聖書には“生きた供え物”になること…と書かれていますが、これは、霊的な働きによる礼拝ということですが、人生を通して礼拝するような生き方のことです。

イエスは、サマリヤの女に向かって「“真の礼拝者”を探している」と言いました。

4:25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」

ここで彼女は、より深い理解を得ました。“メシヤ・キリスト”に辿り着きました。

イエスは「それ（メシヤ）は、あなたと話をしているこのわたしである。」（26節）と言い、これはニコデモには言わなかったのです。

ニコデモは、ラビであったので、あえて言わなかったのでしょうか。

しかし、混血であるサマリヤの女には「わたしがそれです」と言いました。

イエスはサマリヤの女には罪については語っていません。私（講師）は、この女性が本当に神を求めていた人だったからだと思います。

彼女は、正しい教理をもっていたわけではありませんでした。正しく求めてはいたのだと思います。なぜなら、彼女は多くの苦しみを経験していたと思われるからです。5回も結婚したからです。

夫は一人でもこりごりという人もいます。5人は多いはずだし、もう年も取っていただろうし、未来について希望もなかったと思います。

世の中の人々は、色々な苦しみの中にその答えを必要としています。外面では頑張り、強いようであっても、内側はそうでもないのです。

4:27 そこへ弟子たちが来て、イエスが女と話しておられるのにおどろいた。しかしだれも「何のご用で」とか「何をお話で」とかいわなかった。

27節で、弟子たちはイエスが女と話していたので驚きました。

4:28 女は瓶を置いて町へ立ち去り、人々にいった、

女は水がめを置いて行ってしまったのです。彼女の人生が変わってしまいました。なぜ、水がめを置いて行ってしまったのでしょうか？

霊的には、この水が彼女をうるおしてくれるものでもなく、彼女の宗教が彼女を満たしてくれたわけでもなかったのです。

物理的にも、水がめをもっていたら早く走れなかったかもしれないし、霊的には、古い自分の宗教を捨てて行ったことにもなります。

イエス・キリストを見て、経験した人は、その人生が変わるのです。

彼女も自由の身になりました。解放され、満たされました。

もうヤコブの井戸から水を必要とせず、もはや渴いてもいませんでした。

ヨハネはこれを記録したのです。

これを霊的な面から理解できれば、水がめを置いていった意味がわかります。

4:29 「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのでしょうか。」

イエス・キリストに会ったあと、彼女は出て行って福音を伝えました。

「この方がキリストなのでしょうか」—— “ユダヤ人、” “先生、” “預言者、” “キリスト、” です。

4:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください。」とお願いした。

4:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」

4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」

4章32節に “知らない食べ物、” が出てきます。食物は普通、活力を与えますが、イエスにとって父の御心を行うことが活力を与え、彼を支えていました。



福音を伝えていたら元気になる人がいるのと同じです。

4:35 あなた方はいうではないか、『取入れが来るまでまで四か月』と。しかしわたしはいう、目をあげて畑を見よ。色明るく取入れを待っている。

4:36 すでに刈り手は報酬を受け、永遠のいのちへの実を集めている。まくものが刈るものとともによるこぶためである。

4:37 ここに、『まくものと刈るものは別』との諺が当てはまる。

4:38 わたしはあなた方をつかわして、あなた方自身が苦勞しなかったものを刈らせる。苦勞したのはほかの人で、あなた方は彼らの苦勞を取り入れに来ている」と。

このたとえは、「いつも刈り取るばかりでなく種をまく人もいるし、それを未来に刈り取る人もいる」ということです。

4:39 「彼はわたしがしたことを皆いい当てた」と証した女のことばによって、この町の多くのサマリヤ人がイエスを信じた。

この節から、彼女が不道徳な女性ではなかったと思えます。“多くの人々が彼女のことばによって信じた、とあるからです。

4:40 さて、サマリヤ人は彼のもとへ来ると、彼らのところに泊まるよう願った。それでイエスはそこに二日泊まりました。

4:41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。

4:42 そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」

ここでイエスは、サマリヤの救い主になりました。

神はイエスに、この女性に会いに行くように言ったと思います。

——サマリヤに行かなければいけなかった理由が、ここにあったのです。

ここで主から言われている事は、私たち一人ひとりが“サマリヤの女”であり、イエス・キリストは私たち一人を救うために、この地にくだって来なければならなかった…と言う事です。

私自身が多くの罪を持った者で、清められなければならず、イエスはそのような私を探して、私のところに来て救いを与えてくださいました。神は“真の礼拝者”を探し求めています。

そして、これが福音です。